本又八郎編纂

初編 下

手多1
340
2止

門 34
號 2
巻

今古雅俗 石亭畫談初編巻之下

欝悶絶舌 田中訥言

田中訥言尾張人土佐氏の流ゝて和畫技能を典古博識當時ゝ重ぜらる常ゝ言あり我も明を失ハゞ則死せべし晩年ゝ至り盲眼となる訥言元性剛直清廉一も言を食むれ〜今盲目ゝなれり常の言果して如何ゝ人是を危ぶむ訥言言ゝ背らゞ死なんゝ欲して斷食數日命未盡ぜ遂ニ自舌を噬で死せ人これを哀む門人渡邉清浮田一蕙是を兩翼ゝ云文政六年三月廿日卒憤懣殺身 狩野融川

田中訥言
天明名家真像
載る所之圖
名痴字虎頭号
大孝齋

狩野融川名ハ寛信法眼ヨ叙ス性豪爽なり文恭公の時
朝鮮人來朝ス畫院各家ヲ命シテ屏風の畫を畫ラせ是
ヲ來朝の使ヨ授て朝鮮王ヨ贈らんとス融川亦これヨ
預る融川屏風ヨ近江八勝の圖を作り其遠景金砂を施
シ漸ニ濃より淡ヨ及て隈をなし其間樹屋隠顯遠近分
つべし自謂ふ頗るよろしきを得たりとス一日諸有司列坐
其落成の可否を試撿ス老中阿部豊後守曰金砂甚薄
シとなして是を咎む融川曰近景これを濃くし遠景是
を薄くス是臣ガ殊ヨ意我加ふる所也ト阿部矣聽かず
湯ヨ陳ずるものとなして厳ヨ補繕を命ぜ融川忽チ

面色勃然聲音厲しく呼で曰良工の手段俗目の志る所
ゑ非らぬと阿部侯亦怒色顯はる傍人掌中ゑ汗を馳川
急ゑ疾を稱し城を下る途中便輿中ゑ在て屠腹して
死を時年三十八
○評者曰訥言自舌を絶ち馳川自屠腹を俱ゑ性命を
輕んぜ孝經の罪人と云べし然れども其豪壯の氣象凡庸
ゑあらざるを知也

特著衣冒　藤原為久

藤原為久ハ下總守ゑ任じ豊前守為遠の三男すて畫
圖ゑ長じ當時無雙を稱せらる賴朝卿、為久をして聖
觀音の像を畫らしむ為久殊ゑ衣冠をつけて是を畫
く圖成て洛陽ゑ歸る時鞍馬を賜ひてこれゑ餞して是を
賞を事東鑑ゑ出づ

毎蒙手巾　狩野素川

狩野章信素川と號を幕府表畫師也良技を以て法
眼ゑ叙せられ奥畫師ゑ列を常時好で手巾を蒙り
貴客ゑ對する我喜バば其畫同輩畫院中ゑ超へ画風自
一派をなを似て素川風を稱を畫を乞ふもの門前
市を為を然れど花街ゑ遊て游蕩を事を吉原郭
裡の老妓門弟となりて畫我學もの多し田沼侯ハ文恭

公の側用人にて寵臣なり（主殿頭と稱す）時に素川を招に應ぜず
して曰小子性甚寒戎恐る故に頭上巾を脱するを不得
矣之を聽さき那ぞ詣んのごと矣これを許さ矣の第
到り巾を不脱して畫くこれより諸矣これを召に皆
此例に習ふ其貴顯の為に愛せらるる事見るべし家ハ深
川扇橋に在り宅地方六十間高樓を結構して之に居る文
政七年卒さ其孫壽信現存畫をよくさ其女亦粉色
工也

○素川の手巾其花紋を茨子玉（ダマ）と號し之を蒙る狀を
米屋（コメヤ）のぶりにて云是特に鄙人のちなさ所也好て是を用ゐ

憐兒屈節　諸葛監

諸葛監字ハ士文靜齋と號さ本姓ハ清水通稱ハ又四郎
性剛捍（カン）貴客に對ずいへぢ屈するなく人の言を容れぢ
故に又人に容られぢ畫を好めど師授する所なしに只
元明清人の畫を臨寫して自一家をなさ一筆私意を出
さぢ畫く時ハ必古圖を臨さて寛政二年七十二にして卒
さ時に二子あり遺書を光明寺雲室に託して後事を
依賴さ其略に曰長子某已に藤城某に託せり次子庄松
ハ我ら後素の道を繼（ツガ）しめんとさ時に渡邊玄對畫名
高し冀（コヒネガ）ハくは上人庄松を率て玄對に紹介（ヒキアハセ）して塾生

とゝ〜上人亦これゝ意を注げゞ雲室其書茂讀ゝ悽然涙をこれゝ曰諸葛氏強悍不羈一世の間人を憑むれ〜今衰老死ゝ垂んゞ〜ゝる子を思て人ゝ憑る折節如斯遺託ゝ任せて庄松を玄對の塾生ゞゝ〜特ゝ意を加ふ然れど庄松懶惰ゝ〜て業を遂げゞ雲室復一歎をなすと云其事雲室自記の隨筆中ゝあり

愛子反真　狩野探幽

狩野探幽の子探信能家業を繼ぐ其妙齡の時探幽甚これを愛〜人探信ゝ畫を囑するものあゞバ探幽潛ゝ畫を作り探信を〜て欺せ〜め以て囑者ゝあゝふ

是探信の美名を欲する也或曰探幽ハ一世の英士也然て此僻事ある甚いぶか〜と然れ共事口碑ゝあるを以て暫く茲ゝ掲るのみ曾て圖繪寶鑑を見るゝ其略ゝ云宋馬麟ハ馬遠の子父遠其子を愛〜多く己ゞ畫上ゝおいて馬麟作とゝ〜ゝ蓋麟の譽ゝ欲せる也と又曰元趙仲穆の子鳳字允文蘭竹を畫く乃父と真を亂る仲穆毎ゝ題〜て己ゞ作ゞゝ〜て索るものゝ酬ゝ故ゝ鳳の名顯れゞゞゝ云古來亦この黨類あるを知也探幽初名ハ采女法印ゝ叙〜延寶二年十月沒壽七十三

○探幽の塾字ハ王維山水訣ニ歳月遥永頗探幽微と

云く出づ筆法大居士の號ハ後水尾帝の肖像を寫して賜ふ所と云

○探幽の印多くハ木印也探幽家富ミ且好事の人なり然れ共時勢の然らしむる者ゝ其質素を見る如斯

専心撫古　鼎春岳

鼎春岳名ハ元字ハ世寶大坂天滿の人初福原五岳を師ゝ〳〵後収藏家の秘冊を探り戸を閉てこれ戎撮寫し精竭髓枯といへども倦をもらぢ専心すゝて古を撫〳〵て止まゞゝ山中人饒舌ゝ見ゆ竹田嘗て春岳ゝ一會〳〵て真ゝ篤古の士ゝなれと春岳自道ふゝ黄鶴山樵を以て歸と

なれと時ゝ畫名高〳〵

要意知新　僧抱一

僧抱一名ハ文銓姫路侯酒井雅樂頭の庶子なり出て真宗の等覺院ゝ住職ゝ昔者光琳畫ゝ妙といへども法を嗣傳ふるもの稀〳〵然るゝ抱一遠く光琳の畫風を祖述〳〵大ゝ一の法門を開く金井烏洲の無聲詩話ゝ抱一を稱〳〵て温故知新の慧眼と云へり初文晁を師ゝ〳〵後一家をなし雷名を為ゝ及でハ其盛なる文晁ゝ伯仲せり文政十一年十二月寂六十八

○當時書畫を售る者利を得る事抱一文晁二子の贋造

をうるゝ古今和漢數萬人の書畫を售ゝ其多寡相半せゝ云其盛ゐるを可知也抱一佛家の人といへども常ゝ烟霞風月優遊以て身を其間ゝ終る又俳句を好多く畫賛ゝ用ゐ　あで〜まめ垣根のうち九のら大倭、温泉ゝ立〜人の噂や涼臺、曾て光琳百圖二編を著す其縮摹の圖甚工也

鼻上火字　新井白石

新井白石の肖像世ゝ傳摹せ是自寫する所なゝ骨法格度ありて其精妙凡手ゝ非る也嗟呼學術端正博文卓識の餘業猶此技あるる奇なる哉今其像を縮摹し

水干色薄茶
扇裏紅
裏白

此扇水干ゝ添て近衛家より贈られる事折焚柴〻見ゆ

并ニ其題賛を記さ其文ニ曰　誰道是白石磷〻不可磨
誰道是非白石磊〻不可轉眉間火字耳邊門毫兩目流
光礒礪一機應變縱横不然韓客殿上爭得使渠從容斂
手不碎頭柱乎而乃其人之言曰日出之邦源大官耽清氣
豪身桓〻胸中壯略龍虎秘筆下文章星斗蟠可謂國家
之爪牙萬里折衛之臣矣腰下秋水端從上賜身上水干
攝籙所贈踞乎皐比上傲睨日月之表口津〻腹便〻天
下樞機參乎其間推誠及物拯後萬人神化丹青渾成像
表得歴世而真宰儼然不可辱者歟癸未正月通家弟高
岱拜題

眉間白毫　高田敬甫

高田敬甫近江日野の市人也後繪事ゑよりて法眼ゑ叙
さ竹隠さ号さ畫狩野氏及僧古磵ゑ學びて一家を
成〻登龍門の圖の如きハ鯉の全身を飛泉の中ゑ寫し
墨の濃淡を以て隠暎を其間ゑ眎さ尤工夫を加ふと云
べ〻壯歳京攝の間ゑ遊び大ゑ名を得て吳俊明と一時
の領袖さり又佛書を好み其事ゑ精〻く殊ゑ佛像を画
く敬甫眉間ゑ疣ありて白毫を生ぜ故ゑ畫名眉間毫翁
の字を用性温雅ゑ〻て專山水勝地を愛さ寶暦中歿す
年八十餘

深夜染翰　村瀨秋水

村瀨秋水美濃國上有地村の人也初繪事を中林竹洞ゟ
よりて問ハんやこゝに竹洞專傳摹移寫茂以て之を說く秋
水甘心せゞ又南紀ゟ到て介石を訪ふ介石曰今卿の画を
ミる已ゟ成れり何ぞ更ゟ學をせん只畫の要ハ深山幽
谷の勝地を探り親〳〵く雲烟出沒の態を窺ふべき耳と
秋水大ゟ意ゟ叶ふ秋水為人剛記湛深能く書を讀夜く
字茂習ひ曉ゟ到る其兄村瀨藤城人ゟ語て曰吾家盜の
患ゟ〳〵弟秋水終夜翰を染て字を習ふ

早曉試刀　椿椿山

椿椿山本姓平名弼字篤甫通稱忠太椿山琢華休庵ハ
皆號也大橋訥庵ゟ善友ゟり訥庵嘗て言あり余椿山
と交る三十年椿山ハ羸瘦ゟ〳〵て衣ゟ勝へざるもの〳〵
如〳〵然ゟ也ゟ精神極て篤く余と同く片山流の拔刀法を
庄内某ゟ學び吹笙を丹羽某ゟ倣ふ椿山劇忙余ハ多閒
ゟ〳〵て皆これゟ不及一日其故を椿山ゟ問ふ椿山曰僕
終日人の為ゟ畫を作他技を講ずるゟ暇ゟ〳〵よりて自
嚴課を設け毎日昧爽ゟ起て拔刀茂試ゟ辰時ゟ〳〵て
止め暮夜吹笙を習ふ三更ゟ〳〵て息む是或ハ君ゟ羸る
所以ゟゟ訥庵是を聞て憮然これを久〳〵らゟ椿山事を

なを大率如斯其畫の非凡なるも非偶然也又軍法を平山子龍に學び蘊奥を極むと云安政三年九月卒年五十六

好裁縫能 香川氷仙

田能村竹田嘗て上田秋成を南禪寺の鵠居に訪ふ壁間香川氷僊の畫美人の圖をとる其畫白描法にて或ハ裁或ハ熨或ハ尺を按し或ハ商量なを婉然として聲容搦するが如し筆亦纖細にして潤あり秋成曰氷仙畫く所渾て婦人理針絲又ハ中饋を治るの圖にて他におよばと興曰氷僊畫に妙にして且意を女子風教に補あらんとするもの乎最嘉賞すべし氷僊ハ香川素琴の妹にして森竹窓の先配也名ハ園葵字ハ不淑氷仙ハ其號也興有作 氷僊別又名園葵好寫裁縫巧婦姿描法還能諧女事恰如蠶子吐清絲

嫌繕綴勞 江馬細香

江馬細香ハ美濃の人にして醫生江馬蘭齋の女也學識あり詩書共に能なを畫ハ竹洞に學び又梅逸に往來して畫名高し若しなを粉華を事とせず綺麗を用ひず或京に上り梅逸の家に宿なを其妻恠て問て曰女史なを來る日未幾許ならず然るに其結ぶ所の帶破れて裏を

露ハさもの如何細香答曰襲の帯まゝて上京の際已破れこゝり然れど繕綴を加へゞゝて直ゞ京ゞ上るその破ハ素来のみゞ其艶妝の為ゞ意を用ざるかくの如し

○或人賴山陽嘗て江馬の家ゞ寓さて細香の才學を知りて聘せんとさて細香常ゞおもへらく萬人ゞ卓越する者ゞ非れバ醮せゞゝとこの時山陽の伎倆未ゞ著れゞ細香山陽の才學如何を疑て應ぜゞ後山陽の名日ゞゞ高くゝて才學天下ゞ震細香その初ゞ應ぜざる戎耻ぢ終身他ゞ嫁する戎肯ざて寡を以て終る或人又曰山陽意中細香ゞ賢をさる細香亦意中山陽の心を悟る心操遂ゞ他ゞ嫁せゞゝ

○白井華陽曰余の門生有芳と云者あり美濃國ゞ遊び歸る余その山川風土及人物雅俗乃如何を問ふ有芳曰一女子あり細香ゞ號さて學戎好て倦ゝ風姿飄然歳五十ゞ垂んとゝて未男子ゞ醮せゞ亦一奇媛ゝ

茄子示侈　英一蝶

畫を作るゝ奇逸の態をゝさもの八其人とゝりも亦奇也市肆ゞ一の佛龕あり奇古愛さべし貴客豪族爭て之を買ハんゝさて英一蝶之を聞直ゞ往て素囊を傾けて以て吾ゞ有ゝゝさて又新茄子を販るものあり其價貴

くゝて人只間看〳〵て過ぐ一蝶多錢を擲ち忽ち之を買得て乃古龕を置て燈を點じ茄子を調理〳〵て之を啖ひ傲然人に謂て曰是天下第一の快樂也

○假名世説に嵩谷が話として曰一蝶晩年手ふるへて月などのくもぶん廻〳〵用ひさるが夫さへ思まゝならざりけれバ おのづゝのらいざよふ月のぶん廻〳〵

羆皮見豪　高麗繪師麿

高麗繪師麻呂畫を以て齊明帝に仕ふ帝の七年高麗の使羆皮一枚を持來る其價を稱する四綿六十斤市司笑避去る高麗繪師麻呂同姓の賓を私家に設け官に羆皮七十枚を債て席とあさて客皆羞恠て退くやゝ云ゝ興按ずるに繪師麻呂恐らくハ是高麗歸化の人にて其同姓の賓とは高麗の使を云ふるべ〳〵然れバ則本國の使者羆皮の珍物なるを以て價を貪るを憎て此舉あるか然則繪師麻呂ハ氣節の士やと云べ〳〵

換技互學　松尾桃青　森川許六

俳諧師芭蕉姓ハ松尾名ハ桃青壯歳藤堂侯に仕ふ夙に西行の為人を慕ひ特に禪理を修〳〵諸國を周遊して其畫に至てハ固より專門に非ずといへど其風流の餘韻筆致淡雅自然に俗を脫せ門人森川許六畫を能〳〵且文

藻ゐ富ミ撰せる所の風俗文選あり其選中芭蕉の記せる柴門の辭ゐ曰繪ゐ取て予ゞ師とする〳〵風雅ハ教て予ゞ弟子とゐ云〻元禄七年歿さて五十三

○芭蕉一世の間其吟詠許多其數を知べからざ今其姓名を揚て畫ゐ題せるもの茂抽出て僅ゐ數句をのさて自畫自賛ゐ云　いろめ〳〵き音やなられの檜笠、許六ゞ畫ゐ勝角力いつも上手ゐ米れ飯、庵ゐ懸んさて句空ゞかける兼好の繪ゐ　秋の色糟味噌壺もなかりけ李、嵐雪ゞ畫に賛のゞみけるバ　朝顔は下手のゝくさへあハれ也　洛の桑門雲竹自片面の像を畫て賛を乞ゐ

こちらむけ我も淋〳〵き秋のくれ　芭蕉の遺物を記するもの〻中ゐ曰頭陀の内自畫の松島蛸瀉の繪二枚あり向井去來の生涯の寶物ゐせんさて記念ゐ乞へる事有り

○許六ハ近江彦根の藩士れり芭蕉ゞ許六ゐおくる文中ゐ今ハ仕官公の為ゐ長劔を腰ゐをさみ乗らけの後ゐ槍をもゝせ歩行若黨の黑き羽織のもさてそハ風ゐ翻るさるありさまゐ此人の本意ゐハ有べからざと云詞あれバ上等の士分なるべし畫ハ狩野派ゐ類さて或曰安信ゐ學と或芭蕉許六ゐ問て曰繪ハ何の為ゐ好むや答云風

森川許之肖像

興曾て華山人所華の
蕉門四哲之図を
摹せ今縮模して
こゝに掲ぐ
華山人伺ふ
よりて
此図を
作る也
ならびに其ども
華山人之ゐを而
必杜撰なるの迹
なきばらく肖像とせて

雅の為ゆ好む風雅ハ何の為ゆ好むや畫の為ゆ好むといへり學ぶ所二ゆ〳〵て用を為事一なり誠や君子ハ多能を恥といへバ品二ゆ〳〵て用る所一なる事感すべし此等の語有て且其畫の精神微ゆ入り筆端妙を震と甚美稱せり

正徳五年歿歳六十

闘藝替題　木俣守安　岡本宣就

木俣土佐守安弼ハ巖間岡本半助宣就弼ハ安今ともゆ彦根侯の長臣武功を以て顯はる書畫及和歌亦共ゆよくせ後人其筆跡を見るに守安畫を作れば宣就和歌を題し宣就畫を作れば守安和歌を題せて其交情深密察

さる小足るなり守安享年八十八宣就ゝ八十一或三壽齡も亦幾相均し

九刀何史　高嵩谷

高嵩谷名ハ雄蹄ハ屠龍翁一蝶の門人佐嵩之の弟子也曾て賴政怪物を射る圖を淺艸觀音堂の楣間に懸け潛み群集の衆中に紛れ入て其圖を品評するを聞く一日或曰平家物語に猪の早太九刀ぞ刺さりゝるとあり今此畫刀を閃らして高く頭上に過ぐ本文に合せざるに似たりと嵩谷素より本書を見ずして漫然圖を作る也慙悔して遂に是を削り改む戴安道佛像を作り

自帳中ゟ隠れく世人の褒貶をなさてを聞き研思積年也ゟ云安道嵩谷意を繪事ゟつくさて是其域を異ゟして其意を同うしるもの乎

○嵩谷賴政の額を畫ける後多年をへて堤等琳畫を以て自負し韓信出胯下圖を寫し又これを同所ゟ掲ぐ嵩谷の畫額ゟ比例す當時、物ハ附謎語の類問目鐵面皮もの ハとあるゟ答者曰源三位ゟ對する淮陰侯、人多く其意を解せざる判者其批判ゟ窮さて一日偶淺艸觀音ゟ詣で嵩谷等琳所筆の匾額をミて始て其答の意を了解さと云世人嵩谷を重じて等琳を輕ずる事以て知べき也

○蜀山人假名世説嵩谷ハ町畫師ゟて近來の上手也俳諧を好ミ發句をよくせり海鼠の自畫讃ハ望人有れバ誰ゟも速ゟ書て與へ〳〵と云 天地ゟまぐひらき盡さでなまとろゟ

二喬誰妻 佐久間洞巖

佐久間洞巖一號ハ太白彦四郎と稱さ奥州の人ゟて仙臺侯ゟ仕ふ幼時書を能するを以て同藩の画師佐久間友德乞て養子ゟさ初洞巖書畫をよくさてやこいへども學術ゟ〳〵或人の為ゟ二喬讀兵書圖を畫或曰二喬ハ誰ゟ妻ゟるゟと洞巖答ふる所をゟらば心大ゟ耻づ是よ

り感憤力を極めて經史を講習し遂に儒を以て著る
仙臺朱學を奉ずる洞巖を嘗矢とあさて洞巖又能詩
を賦し歌を詠ず新井白石と神交をあさと云

夢談蘇嶽 服部南郭

服部南郭名ハ元喬文學の餘暇畫を嗜む雪舟の風あ
り特に山水を好む南郭死して後其門人肥後隈本の人
白修と云者夢に南郭に會て南郭曰今余木曾山中よ
り來ると話次その地の山水の美をかたるに及て一絶を
賦して曰危峰回合白雲間一路崎嶇不可攀依舊懸崖
三百丈臨泉寺裡老僧閒白修此事を記して江戸なる

服部仲英に示す仲英披閲歎じて曰風韻格調他人の
所為にあらず誠に椽翁の作也といへり晉羊祜死後我
が魂を名山に登るべしと云へり南郭亦此趣にして死
後の靈猶此風致あり宝暦九年七十七卒

○南郭畫に於る周雪又觀翁等の跡あり山水癖有て
自諸國見る所の勝景を寫し是を壁間に展て常の樂
とせる秋玉山服翁墨竹記あり又筆跡品川東海寺の子
院小林院に藏せ南郭の香華院にして墓もさてあり

老遊熊谿 野呂介石

野呂隆年後に第五隆と改む其跡ハ介石紀州和歌山の

藩士也其畫初池大雅及桑山玉洲ゟ學ぶ中頃清人伊孚九ゟ從ひ或ハ和州談の峯ゟ登りて山房藏する所の黄大痴天地石壁の圖を摹し〳〵てこれゟ倣ひ晩年熊野ゟ到り其峰巒谿谷を歴覽〳〵て專其自然の山水を法とす阿部緝洲ゟ石ゟ贈る詩ニ云要知此叟師傳處曾沂熊谿五十回、自註ゟ先生話中の語を用とあり范寛曰人を師とするハ造化を師とするゟちゞ〻ゟ石此意ゟ通ぜり

○村瀬秋水弱齡紀州ゟ至て〻ゟ石を訪門外ゟ立て其内を窺ゟ一の巨屋を設け數人此中ゟありて刀槍を試ミ拳法を挑む偏ゟ講武場の如し〳〵秋水以為是甚文人者流の家に似ゞ〻〳〵或ハ〻ゟ石の家ゟ非ざるやと疑へり然共之を紀さゟ果〳〵て其家也驚て曰〻ゟ石武備ゟる亦如此と

○紀州那智山の深處ハ古來到極むる者ゟ〻ゟ石一の修驗者ゟ謀り米鹽及食器を背ゟ負ひ手ゟ苧繩を携へ行く繩を以て木ゟ懸け巖石を攀ぢ絶壁ゟ登り危谿を渉り七日七夜ゟ〻て終〻ゟ遍覽ス遂ぐゞ云文政十一年を以て卒さて年八十二

形鼠一尾　加藤鄰松

加藤鄰松名ハ茂銀幕府の與力士也狩野榮川ゟ學び時ゟ名あり時輩文麗圓乘と鄰松を併せて專門家外の三

巨手と云貴客の招致甚繁く錫賚夥〳〵嘗幼時甫て四五歳一の圓形を作り中ゟ一畫を横ゟ引き又ノ字を圓形外ゟ寫㊀（如此の形ちなり）或人之をこて何ぞゝ問ゟ鍋蓋ゟて鼠を壓へこゝる所也ゝ答ふ人其秀才ゟ感ぜ

馬三蹄　僧周文等春

周文備州ゟ到るの日一馬童の指頭を以て馬を路上ゟかく找見る其形頗る生動の勢あり然れども一脚を少く周文恠て其故を問ふ馬童睥睨ちて曰和尚畫を知るものゝ否や夫畫ハ神を取るを要するのゝ神備ハれば形自ゟ具ゟて何ぞ馬脚の全と不全ゝを論ぜんゝ周文深く其詞を奇とゝて馬童後周文ゟ隨て畫を學び遂ゟ名找著ゝて等春と號ゝ興曰周文ハ元より六法の名流也今馬童ハ論を聞て奇之も恠ゟ足らざる也等春ハ艸野の一童子ゟて能寫意傳神の理を解ゝて豈奇中の奇ゟあらざるゟ昔者戴嵩鬪牛の圖を作る一牧童之をこて曰牛鬪ふ時ハ力前ゟ在尾を兩股の間ゟ夾む今牛尾を放つもの如何戴嵩初くこれを知るゝこれらの類畫史多く所見也これらハ考證の説ゟ〳〵て等春の逸論と甚こてとるのゝ

二史梅竹　山本梅逸　中林竹洞

山本梅逸中林竹洞共ゟ尾張人壯歳の時相伴て古畫雙

幅を名護屋の大光院ゟ觀る一ハ王元章の梅一ハ李息齋の竹也これゟ各〻梅竹の二字を分て號やくちるまて

兩公馬牛　後京極良經　普賢寺基通

五代の時孫位能く水を畫き張南本能火を畫く皇朝の後京極公良經能馬を寫し普賢寺公基通能牛を寫そ亦雙絶と稱せらる顧ふゟ當時二公同く攝關の位ゟ在て此技ある是孫水張火の類ゟして殊ゟ優ちるもの也

添鐍償過　津田休甫

津田休甫宇喜田氏ゟ仕後髮剃削り俳句を事やまて又琴棋書畫ゟ渉る專ら諸國歴さて嘗て天滿栗東寺ニ

到る僧畫を新裝の歩障ゟ乞乃三虎を畫て去る僧是を見るに虎面常ならざるを覺ゑ熟視初て其面皆鬚毛なるきを知れり他日休甫復到僧この事を告ぐ休甫驚て曰速ゟ是を補ハんやと即其室ゟ入須臾〻て出て曰補已ゟ成れりやと僧往て是を見るゟ一條鬚の加ふる者ゟ只虎傍一の大鐍を寫さるのみ

辨樹防尤　高隆古

高隆古鳥羽僧正ゟ據て一種の畫風を起さて運筆飄逸天然の趣肺腑より出づ曾て一侯の第ゟ詣で山水を寫さて賓客坐ゟ盈てこれをこる一人圖中の樹木を指點〻

て是ハ何の木彼ハ何の樹ぞと問ふ隆古悠然悉く其木を指
〜是ゟ對て曰是ハ紫檀彼ハ黒檀是ハ鍬樹彼ハ檳榔樹是
ハ椰子彼ハ花櫚ぞと衆黙〜て再問ものち〜

○隆古通稱ハ斧四郎姓ハ川勝川勝の本姓ハ秦故ゟ秦
隆古と稱ス一高久靄崖沒後の家を繼ぐ故有て去る
然れど高を以て氏となさてものハ別ゟ意ある也初畫を
依田竹谷ゟ學梅齋と號ス中年京ゟ到渡邉清浮田一
蕙輩ゟ據て國畫の舊式を問ひ終ゟ鳥羽覺融の妙趣ゟ
汲る只其畫の意表ゟ出る哉もつて俗人の眼ゟ入らぐ故
ゟ家道屢空〜然も孰か不凡の手を撿出せざらん遂ゟ

大名を得て世ゟ鳴安政六年卒歳五十九

○隆古畫んぞと欲〜て拱手圖を按ずる良久始て筆哉下
ス敢て卒爾をなさぐ昔者巨勢弘高ものを畫くゟ工夫
一日ぞ云大ゟ此旨ゟ合ス

吏疑盜賊　長谷川雪旦

江戸本郷一勝地を御茶の水ぞと稱ス鰻亭あり守山と呼
一客來りて酒飯を命じ鰻を喰ふ深く亭榭の結構と山
川の位置と哉觀悉く寫〜て去る其夜亭ゟ盜あり主人
意中以て畫間圖をち〜去もの〜所為とちて他日その客
又來る主人之を捕吏ゟ訴ふ吏鐵棍を揮ひ踏入り將ゟ

之を縛せんとして客駭然として大に驚く吏中客を識るものありて曰是老畫師長谷川雪旦なり雪旦生平篤實謹厚何ぞ賊を為者ならんや乃問曰叟何を以て屢來て此家を窺ふや答曰頃者友人齋藤氏江都名所圖繪を編さ其附圖を余に囑さ故に來て勝地の真景をうつさのみと乃稿本を出して吏に示さ吏の意解然主人聞之て深く其粗忽を謝さ満坐一大笑戮なして別る曾て聞此圖繪一たび世に出て紙價頓に貴きに到る其功雪旦に有と云雪旦名は宗秀號は巖岳法橋に叙さ男雪堤亦畫を能さ為人實篤温柔能父に似たりと云

○東都歳事記又雪且の圖する所也男雪堤多くこれを補画せと云

矣認牽頭　十時梅崖

十時梅崖名八賜字八子羽平安の一書生也性靈慧頗多技ふ渉る一歳江戸ふ下る一文士の誘引ふ從ひ雪齋増山侯の第ふ到酒中艶曲をなし且歌ひ且舞ふ所謂手妻輕業の技ふ至まで皆能之を為せ空客其妙ふ驚らざるもし矣意ふ是牽頭也とよりて纏頭を投ゞ之ふ與ふ梅崖笑て之を置て未だ収めゞ時ふ客中或八醮酣ふ乘ゞ書畫を弄して合作をせ梅崖亦之ふ預る寫畫題詩其妙まさ

席中の巨魁とせて矣益驚歎せ是より梅崖矣家ふ往來し遂ふ聘せられて其家の儒官とする後辭して浪花ふ住しこゝふ終る年七十三

示元艦覆　浮田一蕙

浮田一蕙名八可為京師の人畫院寄人館の班ふ入嘉永癸丑米艦來て通信を請ふ摹府講和を以て主ゞとせて一蕙憤懣甚し此時ふ當りて畫を乞ものあれバ神風元寇を覆せ圖を寫して是ふ授く曰往昔元艦を沒せり今何ぞ神助なからんと蓋人をして攘夷の志を激動也平素喜て孝經を讀孝經の圖を作り之を紫府ふ獻ゞ常ふ門弟

ふ謂曰畫ハ小技といへど世教ふ關する事少こからぐ徒ふ
美花錦鳥を畫いて俗眼を悦ばするハ我徒ふ非る也其世
を痛み國を憂へ終身艱難ふ處さ誠ふ烈士也豈一畫工
とゐて論ぐべけんや

察洋舩浮　渡邊華山

渡邊登ハ三宅侯ふ仕て累進老臣とゐる其少年の時禄
薄くして家貧父母ふつりへて孝自畫く所の畫を售て之
ふ給さ其畫を學や紙錢おきふ苦しむ桐葉蕉葉その他
すべて大葉のものを取て紙ふ充つ鄭虔柿葉を取て書を
學と一軌をおさ也天保四年癸巳矣の領國參州田原

ふ到り封内沿海ハ地を廻視して洋舩及各國の旗章を
圖して之を戍卒ふ眎し專心を海防ふ傾く江戸の第ふ
歸るふ及て高野長英小關三英等と西洋の事情を探り
書を作て幕府ふ諷さ所謂鵙舌或問憤機論夢物語等
是也事忌諱ふ觸れ天保十年己亥の夏獄ふ下る其冬田
原に幽閉せらるゐ是より益禍咎ハその主ふ及ぼさん歟
恐れ終ふ屠腹自盡さ實ふ天保十二年辛丑十月十日
也年四十九其田原ふ幽閉せらるゐ時品川海濱を過ぎ
歎じて曰洋舩爰海ふ浮ぶをこん事多年をまくゝと
果して其言の如し登名ハ静定字ハ伯登一の字ハ子安號

ハ峯山全樂堂登ハ其通稱也幽閑中和歌あり　樵積て世ふすゝ竈の烟さきハおのゞ燒そふ煙ありけるふ　清宮秀堅の雲烟略傳ふ年譜を以て華山一世の事を記す甚詳あり男小華畫を椿山ふ學び今現存大ふ名あり

力仿道子　狩野惟信

狩野惟信號ハ養川院幕府繪師中の長官也法印ふ叙さ其家吳道子所畫の觀音の粉本を藏さ殊ふ禁秘とす〳〵て門人といへども容易ふ見る戎許さゞ然るに一日災ふかゝりて是を失ふ某侯の家其吳道子所筆の原本戎收む惟信侯ふ乞て是を摹さん事を索むるふ聽さねゞ因て屢侯の第ふ詣て是を觀る數回ふ〳〵て遂ニ家ふ在て其像を畫き携詣て侯ふ眎ゞ侯是を見るふ筆法秀美彩色鮮麗す〳〵て毫も違ふ所なし〳〵侯訝りて曰此畫門外不出然るに叟何ふ依て之を畫くや答曰熟視數回ふ〳〵て諦記是ふ仿ふ是ふ於て侯其厚志戎感ゞ惟信ゞ畫く所の畫戎取て其原本を與ふゞ云狩野氏今ふ之を傳ふと云

何異駿之　吳俊明

吳俊明字方篤姓ハ五十嵐改て吳とす在て穆翁と號〳〵一ふ孤峯と號ゞ越後新潟の人初狩野氏ふ學ひ後元明清

諸家ゐ法る殊ゐ張平山の畫ゑ愛〳〵是ゐ據る其畫ゑ
學や一樓を作り之ゐ登り下らざる四十年家族といど
も稀ゐ其面ゑ觀るをゝ云終ゐ藝林ゐ名を得こり安永
六年俊明の畫叡覽ゐ入り五色和歌を賜ひ褒稱をゐ
ゑ天明年中歳八十二す〳〵る卒ゑ晉の顧駿之樓ゐ登
まて梯を去り畫を寫ゑゝ之を聞事舊〳〵吳氏之ゐ習
ふゝ吳俊明學術あり詩書も亦よゝ〳〵
○興曰顧駿之去梯の事ハ古畫品録之を載ゑ然るに聖
朝名畫評をゝれバ厲昭の傳ゐ陸探微去の事を以て答
と云文あり又一書ゐ書名遺ス追テ書加ベシ顧愷之の故事とゐゑ其事

跡一二〳〵て其人を異ゐし傳ふる者ゐ多〳〵
○俊明性酒を嗜まゞ或人勸て曰夫酒ゐ掃愁帚也ゝ俊
明曰余幸ゐ太平ゐ生れ六經の訓ゐ薫沐〳〵詩書畫ゐ優遊
ゑ樂餘りあり未嘗て無聊を愁て帚ゑ用ふるをゝらゞ

一卷携旅 狩野探幽

狩野探幽名ハ守信少〳〵て家學を嗣ぎ勤苦甚〳〵其羈旅
の間一宿一次寒曉暑夕の際といへど必筆を取て其睹來
る所の山水艸木ゑ寫〳〵或ハ觀〳〵處の畫幅を背摹ゑて
と云王國器畫ゐ志〳〵吳道子の畫北邙山老子廟ゐ於る
ゑて屢行て仿之窮冬積雪亦倦ゐ〳〵と云大名をゐゑ

もの皆苦學よりなる也

○探幽曾て嵯峨天龍寺の支院某寺ゟ於て廬山瀑布の詩意を畫くゟ李白ありて瀑布を〳〵蓋此寺嵐山戸無瀬の瀑と相對せ故ゟ省と云

兩笈備羈　釧雲泉

釧雲泉名ハ就字ハ仲孚肥前人畫を以て著る酒を愛〳〵又茶を嗜む湯遊をちるせ兩笈あり一ち畫具文房器を收め一ハ茶器及漁獵の具を收む一日畫を寫〳〵一日漁獵をなせ性孤嶺ゟて潔癖あり故ゟ割烹汲淪皆手自之を為せ曾て東山道本莊驛ゟあるの日其寓する所利

根川を隔る十町斗然ども毎晨こゝゟ到て盥漱〳〵且水を汲で歸り茶料ゟ充つ率此類也湯遊中越后出雲崎ゟ終る齡五十三文化八年ゟ事ゟちるせ其地の浮法寺ゟ葬る雲泉沒後田竹田其鄉里肥前國ゟ到りて追慕の意を述て詩を作る其略ゟ曰吹笛詠詩黃大痴董北苑後眞畫師維吾東方受衣鉢、雲仙子外更為誰、雲泉時輩の為ゟ重ぜらるゝ如斯

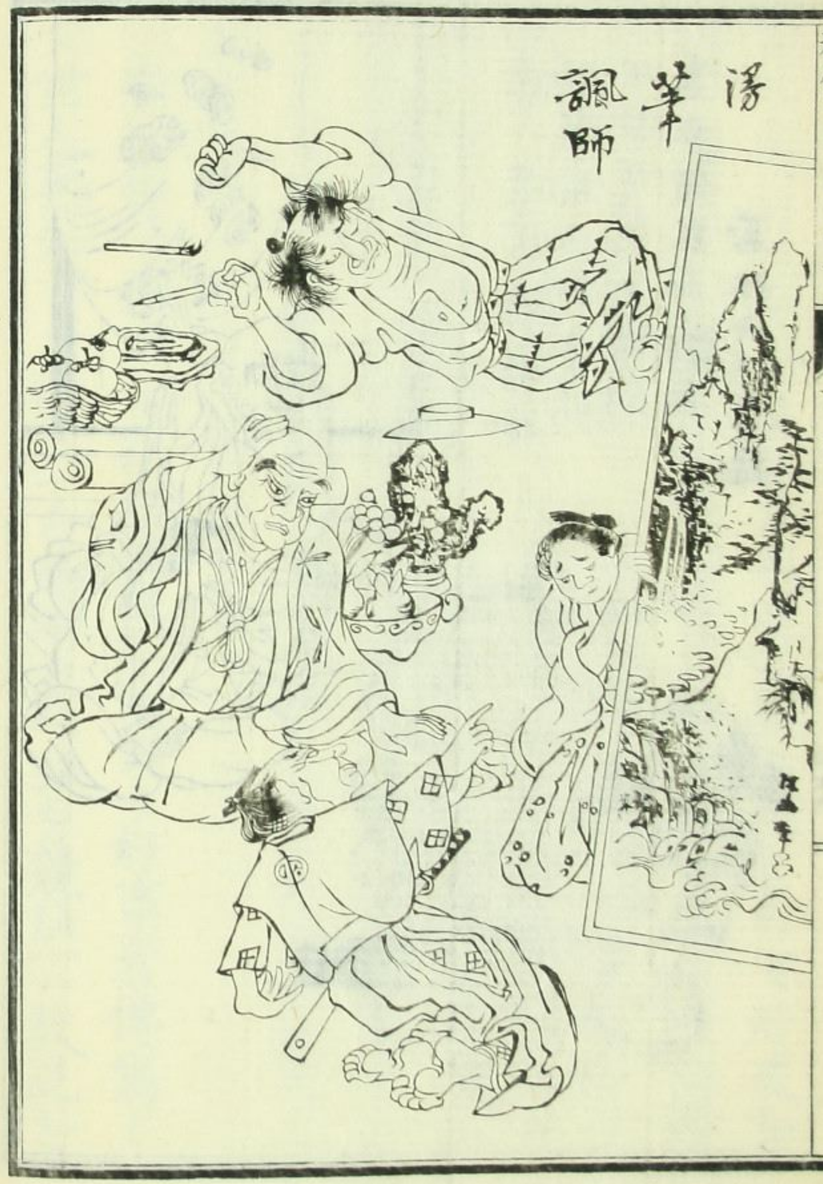
戲墨懲吏　僧覺融

僧覺融ハ世ゟ烏羽僧正と稱せ曾て東寺ゟ在るの日其食邑ゟり供する所の貢米苞子の内充〳〵蓋奸吏の

私を為さ也覺融戯ふ米苞風ふ飄る圖を作て奸吏を諷さ事自然宸聰ふ入る村吏且恥ぢ且畏て遂ふ其惡弊を止むと云名畫記ふ云梁武帝陶弘景ち徵さんと欲す弘景二牛を畫く以て其詔ふ答其牛一ち金籠頭を以て之を牽き一ち逶迤ち て水艸ふ就く梁武其意を ち りて、官爵を以て之ふ逼らぐと云逸士高僧の心意洒落ちる を見るべき也覺融天台座主法務とち り又三井長吏ミ正とちる

○覺融曾て烏羽ふ在無禮講の圖あり好事者傳寫して世人熟知する所也一ち陽物の剛強を競ひ一ハ放屁を

手ミ貢米屢虧金
戯墨諷他奸吏前
不啻黄苞上風耳
紫衣僧正亦飄然
美松山人寫題



鬪ふハさて此等の圖宸覽ふ入て其逸興頤を解ふ至り御
脳之ゞ為ふ愈させゞまふと云其圖様と筆法と詭妙變
態譬ふるゝ物ゝ世ゝ減筆の戯畫戈呼で烏羽繪と唱
ふるハ是其源也就中志貴山緑記の圖筆法真密僧正
殊ゝ意を注ぐ所也其摸本稀ゝ世ふ傳ふ

湯筆諷師　久隅守景

久隅半兵衛名ハ守景性豪放意態飄逸也一日大醉其師
探幽の家を訪ふ探幽會不在也室中某矣囑する所ゝ
山水一幀あり之を見て忽筆を取て其山水中巖間樹
隙ふ人物二三十人鹵薄の状を畫く其頭皆陽物ゝ類に

寫畢て高斷して其傍ふ瞰る探幽適家ふ歸り其畫を見て且驚き且怒る時ふ某侯の使者到り畫を徵して督促止むを〜探幽止を得ざ實を吐て再寫の猶豫を乞使之を侯ふ告ぐ侯意とせざ頓て其畫を收て愛玩すと云探幽一世の鴻匠ちる我以て常ふ自負の色あり守景の意蓋之我諷するふありと云探幽門人ふ桃田柳榮鶴澤探山神足高雲及守景を合せて四天王ゆ稱ゆ云ふも守景獨名を後世ふ擅ふさて

一座齊笑（金井烏洲　菅井梅關）

金井烏洲も上州島村の人也當時奥州の人菅井梅關上州ふ遊ぶ俱ふ畫名高く來往親交をなさて或人烏洲ふ問曰吾子と梅關ゆ孰ら勝る答曰我也或人又梅關ふ問曰吾子ゆ烏洲と孰ら勝る答曰我也或人一日二子と對して告るふ此言を以てさて三人哄然一大笑をれさといふ李嗣眞曰博陵（閻立德）大安（閻立本）難兄難弟と云烏洲梅關亦是兄弟の間と云べ〜

○梅關長崎ふ在の日東福寺の傍ふ一の巨梅あり主僧璞巖日くふ其鐵幹虬枝の狀を倣ひ〜む是より梅を畫く尤進むと云天保十五年卒六十一

再會共嬉（高久靄厓　田能村竹田）

高久靄厓ハ下野の人初江戸ヨ來る貧こと甚し酒債を辯ふる能ハざ愛さてる所の池大雅の畫幅を出さて之を鬻んとさて其妻勝見（妻今野氏の名）之を止て曰良人毎ヨ此幅を謂て我ゲ命ありとさて家貧といへ共豈躬自命を售る者有んや妾願ハくハ身を賣て之ヨ代らんと因て俱ヨ泣く戸外忽人ありり酒を齎し入て曰余是同癖相好するもの也小許の酒債ハ聊之を補ふハんと共ヨ飲をなして醉を盡さ且靄厓ヨ進て曰余文晁の高名を慕ひ遠く江戸ヨ來るといへ共畫風吾希ふ所ヨ非ざ因て隨ひ學ぶ事を欲せざ然れど一世の巨匠也兄都下ヨ名を成さんと欲せバ宜しく

これヨ隨身ゆべし甚益を待んやと靄厓謝恩初より屢名を問といへ共名を告ぜ只九州地方の人とのみ云て遂ヨ去る後年靄厓京ヨ遊ぶの日田能村竹田ヨ會さて之をられバ何ぞ計らん前時酒を齎し來りて語る所の人也二人掌を打て俱ヨ嬉ぶ是より益刎頸の交ちなさと云時なるかち南宗の畫風東ハ高氏を以て起り西ハ田氏を以て興る世間市霸の氣靡然として消さて靄厓名ハ徵字ハ子遠一ヨ疎林外史と稱さ通字ハ秋輔

○竹田名ハ憲字ハ君夷行藏と稱ゆ其他數號あり豊後竹田の人ヨして岡藩の人也邊蓬島淵樫園谷文晁等

ふ學ぶと云元の王叔明を追慕ふて別ふ生面を開く終る年五十九天保五年也

○靄厓布袋の琵琶を彈く畫讃ふ　青柳のいとものしこゝく引ちれゝ心ふ懸るてゝこゝもゝ

○竹田ハ詩及詩餘ふ長ゝ又和歌ふよろゝく和文も長文の物ゝどあり歌ふ　ちりそめし一葉の桐の木間より早ことわりの月そ洩くる　又發句ふ　竹も秋こゝのちいゝれ秋の風

今古雅俗石亭畫談卷之下終

明治十七年六月十三日板權免許
同　年七月　出板
定價六十五錢

編纂兼出板人　静岡縣士族　竹本又八郎　淺艸東三筋町七十番地

賣捌所
日本橋區通壹丁目　北畠茂兵衛
同區西河岸町十二番地　須原鐵二
同區通弐丁目　稲田佐兵衛
京橋區南傳馬町二丁目　吉川半七

芝區三島町　和泉屋市兵衛

浅艸區茅町弐丁目　北澤伊八

芝區柴井町十六番地　土屋忠兵衛

京橋區南鍋町　兎屋誠

芝區露月町十五番地　栗田信太郎

日本橋區通三丁目　丸屋善七